

第二次世界大戦後、日本における東南アジアの地理学的研究

——その成果と課題——

山下 清海

要 旨

本稿は、第二次世界大戦後、日本における東南アジアを対象にした地理学的研究の成果を整理・検討し、さらに今後の課題について考察したものである。

第二次世界大戦後の日本の地理学界における東南アジア研究の推移を概観すると、終戦後まもなく、戦時中、東南アジアに滞在した経験をもつ地理学研究者が中心となって東南アジア研究に携わった。1950年代後半から現地調査が試みられるようになった。東南アジアの地理学的研究においては、全体として農業・農村研究がリードしてきたといえる。長期間の住み込み調査による詳細なモノグラフの作成も試みられた。近年では、農業・農村の急速な変化に大きな関心が集まっている。

東南アジアの都市を対象にした地理学的研究は少なく、最近になって多くみられるようになってきた。東南アジアの工業化や経済発展については、多方面から大きな関心が払われているにもかかわらず、地理学分野の研究は少ない。東南アジアにおける民族・文化に関する研究では、少数民族についての地理学的研究がやや目立つが、この分野の研究は今後の発展に期するところが大きい。

全体として、東南アジア研究に対する日本の地理学の取り組みは、これまで十分ではなかったといえる。今後、東南アジア研究における日本の地理学の課題として、フィールドワークをより重視すること、研究対象地域や研究分野の拡大を図ること、東南アジア研究に積極的に取り組む若手の地理学研究者を育成すること、などが指摘できる。

キーワード 東南アジア、地誌、地域研究、海外調査、フィールドワーク

I はじめに

近年、日本では国際化が盛んに叫ばれる中で、多くの大学に地域研究や国際関係に関する学部・学科・コースなどが相継いで設立された。一方、比較的大きな書店では、海外事情や国際関係などのコーナーが設けられ、世界各地の政治・経済・文化などを扱った書籍が並べられている。このように、海外地域に対する社会一般の関心が高まっているにもかかわらず、これに応えるべき地理学あるいは地理学研究者の役割・貢献・発言力は、残念ながら小さいといわざるを得ない。

日本の地理学界における海外地域研究は、東南アジアに限らず、近年しだいに増える傾向にある。雑誌「地理」（古今書院）にも、地理学研究者による東南アジア関係の報告がたびたび掲載されて

いる。しかし、学術論文として発表される東南アジアの地理学的研究はきわめて乏しく、東南アジア研究に専門的に取り組んでいる地理学研究者はわずかにすぎない。日本の代表的な地理学関係の学会誌である「地理学評論」・「人文地理」・「経済地理学年報」などをみても、掲載された東南アジア関係の論文数は非常に少ない¹⁾。

このような状況の中で、1991年度の経済地理学会シンポジウムは、「海外地域研究の課題——アジア地域の場合——」をテーマに開催された。このシンポジウムでコメンテーターを務めた者として、筆者は本稿において、第二次世界大戦後、日本の地理学における東南アジア研究の成果を整理・検討し、今後、東南アジア地域研究において、地理学がより重要な役割を果たすための課題について考察したい。

第二次世界大戦前の地理学研究の成果に関しては、すでに寺本(1987, 1988)が文献目録を作成している。また、野間(1989)は、第二次世界大戦前における地域概念としての「東南アジア」や、欧米における東南アジアの地理学的研究の成果を展望している²⁾。本論では、原則として、第二次世界大戦後に日本の地理学研究者によって書かれた東南アジア関係の文献を考察の対象とするが、当然ながら、それらをすべて網羅することはできないので、比較的重要と思われる文献を選択して検討する。本稿で検討の対象とした地理学的文献は、人文地理学分野のものがほとんどであり、自然地理学的な文献は、人文地理学との関連が深いものに限って取り上げる。

本稿では、まず、第二次世界大戦後、日本における東南アジアの地理学的研究の推移を概観する。次に、東南アジアに関する地理学的研究の成果を、農業・農村、都市、工業化・経済発展、民族・文化の四つのジャンルに分けて検討を行う。そして最後に、東南アジアを対象とする地理学的研究の課題について論じることとする。

II 日本における東南アジアの地理学的研究の推移

前述したように、分野別の検討は次章において行うので、ここでは、第二次世界大戦後、日本における東南アジアの地理学的研究の全体的な流れを把握しておきたい。第1表は、第二次世界大戦後における東南アジアに関するおもな地理学関係の図書、および関連事項を年表にまとめたものである。

第二次世界大戦前、日本の地理学界では、東南アジアに関する研究は乏しかった。しかし、第二次世界大戦が勃発し、日本が東南アジアを占領すると、この地域に対する地理学的関心は一気に高まった。伝統的に海外地域研究に関する論文を多く掲載してきた「地学雑誌」においても、1941～1944年には海外地域研究の論文掲載が急増した。なかでも、東南アジアを中心とした鉱産資源関係

の論文が目立つようになった(谷内, 1991)。

終戦後、日本人地理学者の東南アジア研究は、現地調査が困難な状況下で、しばらく停滞を余儀なくされた。その中で、いち早く東南アジア研究の成果を発表していったのは、第二次世界大戦中、東南アジアに滞在して研究に従事した経験をもつ能や別技であった。能は、主として東南アジアの集落地理学的側面からの研究を行い(能, 1959)、それらの成果の一部は能(1970)に収められている。

別技は、第二次世界大戦後の日本において、東南アジアの地理学的研究の発展に多大の貢献をしてきた³⁾。第二次世界大戦中の3年半あまり、インドネシアで地理学的調査を行った別技は、その成果を別技(1960)にまとめた。本書は、インドネシアの総合的な人文地理学的研究であり、とくに海上交通や開発史など歴史地理学的考察に重点が置かれている。のちに別技は、本書をさらに発展するかたちで、対象地域も東南アジア全域に広げて、別技(1972)を書き上げた。その後、別技は、東南アジアの「科学的な地域研究」の先駆者であるラッフルズの研究業績を批判・評価している(別技, 1977a)。さらに、別技は、東南アジア地理に関する啓蒙書を執筆し、地理教育的な側面でも、大きな貢献をした(別技, 1969, 1977b)。一方、第二次世界大戦後、東南アジアの地理学的研究の発展に尽くした石田は、東南アジアの地理学的課題についてまとめている(石田, 1966)。

第二次世界大戦後、地理学研究者による東南アジアの現地調査は、1950年代後半ころからみられるようになった。岩田は、1957年、民族学協会派遣の東南アジア稲作民族文化総合調査団の一員として、ラオスの村落調査を実施した(岩田, 1960)。また、高橋は、フィリピン政府給費留学生としてフィリピン大学に留学し、中部ルソンの稲作農村の調査を行った。当時、地理学における海外調査への関心が高まってきたことを反映して、雑誌「地理」において、海外調査に関する座談会が企画された(岩田ほか, 1960)。その中で、38歳の岩田と28歳の高橋が、若き地理学者としての調査体験と、海外調査の課題について論じているが、

第1表 日本における東南アジアの地理学関係図書刊行の推移

刊行年	地理学関係図書	年	備 考
1955	『世界文化地理大系第9巻 東南アジア』平凡社編	1957	東南アジア稲作民族文化総合調査団派遣
1958	『新しい世界の地理第2巻 東南アジア』入江敏夫編	1959	アジア経済研究所設立
1959	『新世界地理第4巻 東南アジア』渡辺 光編		
1960	『東南アジア諸島の居住と開発史』別技篤彦		
1961	『東南アジア』ドビー, E. H. G. 著, 小堀 巖訳		
1962	『アジアの歴史地理』日本歴史地理学会編	1963	文部省科学研究費における「海外調査」の制度化
1964	『東南アジアのこころ—民族の生活と意見—』岩田慶治	1963	京都大学東南アジア研究センター設立
1964	『世界の文化地理第2巻 東南アジア』鈴木二郎ほか編	1964	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所設立
1965	『中部ルソンの米作農村—カトリナン村の社会経済構造—』高橋 彰		
1966	『プランテーション』別技篤彦		
1966	『ベトナムの農民』菊池一雅		
1968	『ボルネオの人と風土』海野一隆・林 寿一	1968	経済地理学会シンポジウム開催 テーマ「海外地域研究の成果と方法」
1969	『アジアの農村』大野盛雄編		
1969	『東南アジアの地理』デルヴェール, J. 著, 菊池一雅訳		
1969	『モンスーンアジア—その自然と人間—』別技篤彦		
1969	『地理教師のみた東南アジア』全国地理教育研究会編		
1969	『東南アジアの漂海民—漂海民と杭上家屋民—』藪内芳彦		
1970	『熱帯の焼畑—その文化地理学的比較研究—』佐々木高明		
1970	『湿润熱帯』能 登志雄		
1970	『東南アジアの地誌』山口弥一郎		
1971	『東南アジアの少数民族』岩田慶治		
1971	『世界地理3 東南アジア』渡辺 光編		
1972	『世界地誌ゼミナールII 南アジア』岩田慶治編	1972	『東南アジア=ハンドブック』松本重治編(毎日新聞社)
1972	『アジア社会誌—東南アジア編—』別技篤彦		
1974	『ビルマ—地誌・歴史・経済—』シュトルツ, H. U. 著, 野上裕生訳	1973	日本地理学会シンポジウム開催 テーマ「アジアにおける『緑の革命』と農村の変貌」
1976	『マラヤの地域構造—形成と変容—』平戸幹夫		
1977	『モンスーンアジアの風土と人間』別技篤彦	1977	『東南アジア学への招待』矢野 暢編(日本放送出版協会)
1977	『東南アジア地域研究史序説—ラッフルズの業績を中心に—』別技篤彦		
1979	『河川の開発と平野—東南アジアを中心として—』大矢雅彦	1978	『全訳世界の地理教科書シリーズ タイ』(帝国書院) 以後, インドネシア・フィリピン・マレーシアを刊行
1979	『ケンをつくる人々』菊池一雅	1978	『東南アジア社会文化辞典』河部利夫編(東京堂出版)
1982	『熱帯デルタの農業発展—メナム・デルタの研究—』高谷好一		
1983	『小さな国の大きな開発』矢延洋泰		
1984	『アジア諸国の人口都市化』大友 篤・嵯峨座晴夫編		
1984	『東南アジアの国家と住民』菊池一雅		
1985	『東南アジアの自然と土地利用』高谷好一	1985	「特集: いま東南アジアは」『地理』, 第30巻第4号
1986	『人間・遊び・自然—東南アジア世界の背景—』岩田慶治	1986	『東南アジアを知る事典』石井米雄ほか編(平凡社)
1987	『東南アジアのチャイナタウン』山下清海		
1988	『東南アジア農業の商業化』梅原弘光編	1988	『新・東南アジアハンドブック』滝川 勉編(講談社)
1988	『ベトナムの少数民族』菊池一雅		
1988	『シンガポールの華人社会』山下清海		
1990	『変貌するアジア—NIEs・ASEAN 諸国における 開発と地域変容—』アジア地理研究会編	1990	『講座 東南アジア学』[全10巻, 別巻](弘文堂)刊行開始
1990	『東南アジアの自然』高谷好一編		
1991	『東南アジアの土地制度と農業変化』梅原弘光編		

それらは今日にも通用する内容を含んでいる。

1960年代に入り、文部省科学研究費による「海外調査」が制度化され、地理学者による東南アジア現地調査も急速に増えていった。そして、現地調査の体験報告もまとめられるようになった(海野・林, 1968; 藪内, 1969)。1968年には、経済地理学会シンポジウムが「海外地域研究の成果と方法」をテーマに開催され、地理学者による地域研究や現地調査のあり方、課題などについて活発な議論が行われた(高橋, 1969a)。この時期になると、高校の地理教師による東南アジア巡検も試みられるようになった(全国地理教育研究会編, 1969)。

1970年代には、東南アジアに関する出版物も多くなり、文化人類学者の活躍が、いっそう目立つようになった。そして、アメリカから導入された地域研究が、日本でも着実に根付いてきた。このような状況の中で、地理学研究者の文化人類学へのいっそうの接近、あるいは転向もみられるようになった。その一方で、日本の経済成長につれ、それまでの調査団という形態のみならず、個人的に東南アジアの現地調査を試みる地理学研究者も増えてきた。

1980年代以降、東南アジア研究は飛躍的に発展した。出版物をみても、それまでは、たとえ東南アジアの一部の地域を扱った内容の本であっても、営業上の配慮からか、タイトルに「東南アジア」を冠したものが多かった。しかししだいに各国別の書物がみられるようになり、しかも研究の内容もより専門化してきた。1990年には、若手地理学研究者によって、東南アジアの経済・社会の現代的課題を扱った書物も出版されるようになった(アジア地理研究会編, 1990)。具体的なさまざまな成果については、次章の分野別考察の中で取り上げることにする。

次に、東南アジア地誌について検討しよう。日本人研究者による東南アジアの地理学的研究がしだいに多くなってきたにもかかわらず、総合的な東南アジア地誌の書物は、外国人による業績の翻訳に依存するところが大きかったといえよう。例えば、欧米の地理学者による東南アジア地誌の翻訳

書としては、ドビー(1961)やデルヴェール(1969)がある。国別にみると、ミャンマーに関するシュトルツ(1974)があり、インドシナを中心に研究してきたグルーの名著も翻訳された(グルー, 1971)。

第二次世界大戦後、日本人研究者によって編纂された東南アジア全域をとりあつかった地誌書としては、入江編(1958)、渡辺編(1959, 1971)、山口(1970)、別技(1972)などが刊行された。渡辺編の2冊は、5, 6人によって執筆されたもので、地誌のスタイルとしてはオーソドックスなものである。岩田編(1972)の書名「南アジア」は、東南アジア・南アジア・西アジアを対象にしたもので、総論より各論中心の内容になっており、フィールドワークの成果にもとづく東南アジア関係の論文数編が含まれている。菊池(1984)は、東南アジア各地の政治・経済・社会などのトピックを中心にまとめたものである。

平凡社編(1955)や鈴木ほか編(1964)は、啓蒙的なスタイルをとりながらも、その内容は充実している。また、1978年からは、東南アジア各国(タイ・インドネシア・フィリピン・マレーシア)で使用されている地理教科書の翻訳が、帝国書院からシリーズで刊行された。これらは、当該国の全体および国内各地域の地理的特色を理解する上で、非常に有用なものである。

III 分野別にみた東南アジアの地理学的研究

1. 農業・農村研究

第二次世界大戦後、日本における東南アジアの地理学的研究は、農業・農村研究がリードしてきたといっても過言ではなからう。

先に述べたように、岩田は、1957年にラオスの農村の実態調査を行った(岩田, 1960)。高橋は、フィリピンの中部ルソンの稲作農村に10カ月間住み込んで、インテンシブな調査を行い、稲作農村の社会経済構造の実態を描き出した(高橋, 1965)。それまで、地理学の分野では、海外調査で長期間

住み込み調査を行うことは、ほとんど試みられなかった。本書には、高橋自身が測量して作成した地図をはじめ、多くの地図が収められており、当時、著者が地理学的手法を積極的に用いて調査に従事したことが伺われる。

大野編(1969)は、日本におけるアジア研究の大きな成果の一つである。本書にみられる農村研究の基本的な方法は、「ともかくも、『むら』にはいりこみ、農民と生活をともにしてみなければ、むらについてなにもいえないのではないかという気持ちさえもっている」(p.33)という編者大野の言葉に示されたとおりである。このような住み込み調査にもとづいて、高橋(1969b)はフィリピンの中部ルソンの稲作農村の実態を、友杉(1969)も北部タイの稲作農村の実態を、それぞれ明らかにした。両者は、ともに論文の中で、調査地の選定経過、住み込み調査の具体的方法などについても述べており興味深い。

高橋と同じ、フィリピンで農村の住み込み調査を試みたのは梅原である。梅原(1972)は、フィリピン国内で最も中心的な農業地帯を形成する中部ルソンで村落実態調査を行い、農村の社会経済構造に関する詳細なモノグラフを作成した。そのほか、フィリピンの農業・農村に関する研究として、規工川(1981)は稲作地域の灌漑の発展について、山川(1982)は村落の社会経済構造について、それぞれ報告している。また、高橋(1982)は、東南アジア島嶼部のフィリピンとインドネシアの農村の社会経済構造について、比較調査を実施したものである。インドシナの農村研究では、菊池の一連の研究成果がある(菊池, 1966, 1975)。

東南アジアにおける農業・農村の変化は、地理学的に重要な課題である。とりわけ、1960年代後半からの「緑の革命」については、経済学・農学をはじめ多くの学問分野で大きな関心もたれてきた。地理学の分野においても、1973年に、「アジアにおける『緑の革命』と農村の変貌」というテーマで、日本地理学会のシンポジウムが開催され、インドやバングラデシュなどの事例報告とともに、梅原がフィリピンにおける「緑の革命」の問題点を指摘している(石田ほか, 1974)。また、

梅原(1978)も、「緑の革命」に伴う農村の変容に関する詳細なフィールドワークの報告である。高度成長により、東南アジアの伝統的農業は、1960年代後半からの「商業化」に伴い大きな変化過程に巻き込まれていったが、Umehara(1987)および梅原編(1988, 1991)は、このような東南アジア農業の商業化に焦点を当てたものである。

稲作のほかに、東南アジアにおける重要な農業形態として、焼畑とプランテーションがある。東南アジアの焼畑に関しては、佐々木(1970, pp. 123-174)が、焼畑の輪裁様式や焼畑農耕民の村落の形態・構造などについて詳しく分析している。一方、プランテーションに関して、別技(1966)はプランテーション全般にわたる概説書の役割をもつものであり、本書の中でマレーシアのゴム栽培、インドネシアのサトウキビ栽培などの事例が紹介されている。植民地経済システムの遺産としてのプランテーション農業の近年の変化過程については、マレーシアを例に神前(1990)が論じている。また、山下(1990a)は、華人経営によるカカオのエステートの実態について報告したものである。

熱帯の植民地において、避暑地として発達した山地集落、ヒル・ステーション(hill station)は、東南アジアにも多くみられる。Shirasaka(1988)および白坂・Lai(1990)は、マレーシアのキャメロン・ハイランドの事例を調査し、野菜栽培の発展について論じた。また、斎藤功(1990)も、台湾から東南アジアにかけてのヒル・ステーションの特色を概観している。白坂や斎藤功の研究は、ともに日本の高冷地における観光地や農業に関する豊富な研究経験を、東南アジアのフィールドに生かした成果である。

東南アジアの漁業や漁村に関する地理学的研究は乏しい中で、藪内の研究は貴重である(藪内, 1968, 1972)。また、近年関心が高まっている東南アジアの水産養殖業に関しては、大島(1977)、斎藤毅(1978)の先駆的研究がある。

東南アジアの自然環境と農業とのかかわりについては、高谷の一連の研究があり、とりわけチャオプラヤ・デルタを対象に詳細な研究がなされて

いる(高谷, 1982, 1985). なお, 高谷編(1990)は, 東南アジアの自然に関する日本で最初のまとまった書物といえよう. また, 大矢(1979)は, 東南アジアの河川や平野について論じている.

2. 都市研究

以上みてきたように, 地理学に限らず, 日本における東南アジア研究は, 第二次世界大戦後, 農業・農村を対象にした研究を中心に展開されてきたといえよう. これに対し, 東南アジアの都市を対象にした地理学的研究は少なく, 1980年代に入り多くなってきた.

東南アジアの都市の地域構造に関しては, 田辺(1971, pp. 183-216)が概括的に論じている. 筆者自身も, 東南アジアの都市を構造的にも景観的にも特徴づけているチャイナタウンや, 都市内部における華人方言集団のすみわけの形成・変容について, 実態調査にもとづいて考察してきた(山下, 1987, 1988a; Yamashita, 1986, 1987). 東南アジアの都市内部のスラムやスクォッターについて調査した日本の地理学研究者は少ないが, 藤巻(1989, 1990)は, 代表的な多民族都市であるクアラルンプールのスクォッター社会について考察している. ジャカルタの都市カンポンを対象にした研究としては, 熊谷(1990)がインフォーマル・セクターの経済活動を, 瀬川(1990)がさまざまな民族から形成されたカンポン住民の生活を, それぞれ報告している.

都市化に関しては, 平戸(1988)および中原(1991)が, マレーシアを対象に, プミプトラ政策(いわゆるマレー人優先政策)の下で加速化された都市化と, その民族的背景などについて論究している. 大友らは, 人口学的視点でとらえた都市化を「人口都市化」とよび, 統計処理により, 東南アジアを含むアジア全体の都市化について論じている(大友・嵯峨座編, 1984). 都市システムの視点からは, 佐藤(1985)がタイの事例を検討している. また, 遠藤(1991)も, タイの地方都市の例として, チェンマイを取り上げ, 人口成長とその要因について分析している.

東南アジアの都市研究において, 地理学の貢献

が期待できる分野として, 特定都市を対象に, 自然, 歴史, 経済, 社会, 文化的特色などを総合的に考察した研究, いわば都市誌の作成があげられよう. このような文献は, 各種研究者のみならず, 一般の社会人にとっても「役に立つ」「参考になる」ものである. すでに, これまでにも, 地理学研究者によってすぐれた都市誌的成果がみられる. バンコクに関する大友(1979), クアラルンプールに関する生田(1989), シンガポールに関する太田 勇(1979), 高山(1986)などの研究があげられる. そのほか, 正井(1986)は, 東南アジアの都市景観に焦点をあてた数少ない研究の一つである. 都市の歴史地理学的研究としては, シンガポールに関する大西(1971)や, ベトナムの都市形成についての太田晃舜(1987)の研究がある.

3. 工業化・経済発展

近年の東南アジアの経済発展は, 世界的にも注目されているが, 日本の経済地理学者も, 比較的早くから, この地域の工業化に関心をはらってきた. シンガポールの工業化に関しては, 村上(1968)が工業化の背景や過程を, 総合的に記述・分析している. 台湾の地理学者である厳(1972)の研究は, シンガポールの工業化を, 華人資本に重点を置いて分析しているところに特色がある. また, 太田 勇(1976)は, 工業化の経済的側面にのみ限定せずに, 近代工業の発達が多民族国家シンガポールのエスニシティに与えた影響について考察している. シンガポールの工業化, 住宅開発, 水資源問題などを論じたものとして, 矢延(1983)がある.

一貫して, マレーシアの地域研究に従事してきた平戸は, イギリス植民地下で, すずとゴムのモノカルチャー的地域構造がいかに形成されたか, また独立後, それがどのように変容したかについてまとめた(平戸, 1976). また, 平戸(1988, 1991)は, マレーシアのプミプトラ政策の成果について検証している.

アジア地理研究会編(1990)は, 経済地理学的な立場から東南アジアの最近の社会・経済の動向を検討した論考を含んでいる. 生田(1990)は,

クアラルンプール都市圏におけるショッピング・コンプレックスの急増など、流通の近代化について考察している。また、秋山(1990)は、経済発展に伴って生じた環境問題について論じたものである。

4. 民族・文化研究

東南アジアの民族・文化に関する分野では、早くから文化人類学研究者によって、すぐれた研究が蓄積されてきた。東南アジアは、いずれの国も多種多様な民族から構成され、とりわけ大陸部の山地には、「生きた民族学博物館」といわれるほど、さまざまな少数民族が生活している。

地理学研究者の中では、いち早く岩田がラオス・タイなどの山地民族の生活・文化について実態調査を行い(岩田, 1964, [1967]), それらの成果は、岩田(1971)に集大成されている。インドシナ、とりわけベトナムを中心に研究を進めてきた菊池も、ベトナムの少数民族についてまとめている(菊池, 1988)。また、菊池(1979)は、東南アジア大陸部に住むさまざまな山地民族の中から、ケシ栽培で知られるメオ族に焦点を当てて、メオ族の歴史や生活について論じたものである。ミャンマーの少数民族に関しては、酒井(1971)がある。

一方、東南アジア島嶼部の民族に関しては、海野・林(1968)が、ボルネオの陸ダヤク族やイバン族(海ダヤク族)などの生活を調査している。また、藪内(1969)は、東南アジアの漂海民についての調査記録であり、今日、変化が著しい漂海民の伝統的生活形態を知る上で、貴重な成果といえる。

上述のような山地民族や漂海民に関する大きな研究関心に比べ、都市に多く居住し、経済的にも東南アジアの多民族社会の中で重要な役割を果たしてきた華人(いわゆる華僑)を対象にした地理学や文化人類学の研究はあまり多くはない。華人を対象にした地理学的研究の特色の一つは、華人社会の地域性の究明であろう。この点に関して、斎藤一正(1961)は、資料にもとづいて概観している。現地調査にもとづいた東南アジア華人社会に関する総合的研究としては、船越(1972)があげ

られる。筆者自身も、シンガポールをはじめ東南アジア各地の華人社会やチャイナタウンの実態調査を行ってきた(山下, 1982, 1987, 1991)。華人社会は、さまざまな方言集団によって構成されているが、山下(1985, 1988a)およびYamashita(1986, 1987)は、シンガポールにおける華人方言集団のすみわけの形成と変容の過程について論述したものである。さらに、中国における華人移民の出身地(僑郷とよばれる)との関係については、山下(1990b)で分析されている。太田勇は、近年における華人社会の変容を、言語や意識の面から一貫して追求してきた。太田勇(1985)、Ota(1985)および太田・今富(1987)は⁴⁾、英語重視政策下のシンガポールやブミプトラ政策下のマレーシアを対象に、言語環境の変化に対する華人の対応などについて考察したものである。なお、マレー人を対象にした研究を行っている数少ない地理学研究者である平戸(1988, 1991)は、マレーシアのブミプトラ政策の下でのマレー人社会についても論じている。

文化地理学の分野で、食文化に焦点をあてた研究はきわめて少ないが、タイ東北部の村落において、約5カ月間定着調査を行い、村民の食生活を詳細に記述した野間(1982)のモノグラフは、意欲的な試みである。また、家屋景観に関しては、杉本(1971)が、東南アジア各地でみられるさまざまな家屋の特色をまとめている。

IV 東南アジア研究の課題

—むすびにかえて—

以上、本稿では、第二次世界大戦後の日本の地理学分野における東南アジア研究の推移や成果について検討してきた。その結果、残念ながら、東南アジア研究に対する地理学の取り組みは、これまで十分ではなかったといえよう。第1表に示したように、近年、東南アジア地域研究関係の叢書・辞典類などの刊行がみられるようになってきたが、地理学者の執筆はわずかにすぎない。とはいえ、1980年代に入り、東南アジアを対象に研究を

進めている地理学研究者は着実に増えてきており、今後の研究の発展が期待される。本章では、日本の地理学における東南アジア研究の発展に向けて、これまでの反省と今後の課題について整理しておくことにする。

1. フィールドワークの重視

日本における東南アジアの地理学研究では、比較的長期にわたるフィールドワークにもとづく研究が、今後さらに増えていくことが期待される。この点では、文化人類学をはじめ他の学問分野の調査方法から学ばねばならない点が多い。最近、東南アジア各国において各種統計の整理が進んできたが、統計の処理にもとづく論述中心の研究も少なくないように思われる。1960年代の農業・農村研究に多くみられたような、十分なフィールドワークにもとづくモノグラフの作成は、今日でもきわめて重要な地域研究の方法であろう。地理学研究者による東南アジア各地のモノグラフ的成果の蓄積が必要である。経済面のみならず、対象地域の住民の生活の実態や価値観までもを描写し、社会・文化に深く踏み込んだ研究を行わなければ、地理学の研究は、臨場感、生活感に乏しいという批判を免れないだろう。

一方、モノグラフの作成により、研究対象地域の地域的特色を把握することと同時に、国家あるいは東南アジアというレベルでの普遍的特色の究明にも努めねばならないことは言うまでもない。地理学研究者が、他の分野の研究者以上に、地域的差異を重視し、自然はもとより、経済・社会・文化・政治など多方面に関心をもって、大都市のみならず国内各地を幅広く歩き回っている（歩き回ろうとしている）ということは、われわれ地理学研究者の強みになるものである。自然条件と生活との相互関係の解明、景観の特色の把握とその説明・解釈、地図の利用・作成などは、近年、他の学問分野でもしだいに重視されてきているが、これらは依然として、地域研究における地理学の重要な武器であることには変わりがない。このことは、他の学問分野との共同研究において、筆者がしばしば痛感することである。

2. 研究対象地域・分野の拡大

これまでの東南アジアの地理学的研究では、研究対象地域および研究分野にかなりの偏りがみられた。フィリピンをはじめ、シンガポール・マレーシア、さらにタイに関する地理学的研究はいくらかみられるが、その他の地域に関しては、研究者、研究例ともに乏しい。東南アジアの大国であるインドネシアを対象にした地理学的研究は、あまりにも少なすぎる。インドシナ3国やミャンマーに関する研究は、フィールドワークの実施に困難さはあっても、今から積極的に研究に取り組んでいくべきであろう。石油王国ブルネイの地理学的研究も、日本ではほとんどなされていない。

研究分野についても、これまでも述べたとおり、農業・農村研究は比較的多い。しかし、水産業や林業に関する地理学的研究は、非常に限られている。東南アジアにおけるエビの養殖や熱帯林の伐採・森林破壊などについて、社会的な関心が高まっている今日、これに応えられる地理学的研究の蓄積が少ないのは惜しまれる。

都市地理学的分野においては、都市の地域構造にかかわるスクォッターや、民族集団のすみわけに関する問題は、今後もさらに進めていくべき重要な課題である。また、すでに述べたとおり、都市誌的な成果を今後も蓄積していくことは、他の学問分野からも歓迎されるであろう。この場合、大都市だけでなく、地方都市についての研究にも着手していくことが望まれる。

経済地理学的研究では、経済統計に大きく依存する傾向がなきにしもあらずである。国家スケールの論考のみならず、国内の一部の地方、都市、村落のような小さな地域レベルでの詳細な実証的研究が蓄積されていけば、東南アジア研究における経済地理学の説得力がより増すのではなかろうか。最近のASEAN諸国の経済発展に関しても、そのプロセスや現状を、ある地域に即して具体的に説明する研究をみたいものである。例えば、日本国内でよく行われてきた工業地域の形成過程や構造などについての研究を、バンコクやクアラルンプールなどで試みたならば、地理学以外の分野からも大きな関心を集めることであろう。

民族や文化に関する従来の地理学的研究でも、研究対象に偏りがみられた。少数民族の研究は今後も推進されるべきであるが、タイ族、ビルマ族やマレー人のように、多民族国家の中で多数派である民族に関する研究も、非常に重要である。東南アジアに居住する華人の研究に比べると、インド人を対象にした地理学的研究が、ほとんどみられないのは不思議なくらいである。日本の海外地域研究においては、経済面に比べ、社会・文化的な側面からのアプローチが少ない。現地で生活している人々の生活様式を十分に理解するには、やはり短期間の調査・研究では困難である。現地のマスコミには表れない政治状況、民族間の微妙な感情、人々の生活習慣や思考様式なども理解できるようになるには、かなり腰を落着けた研究が必要である。すなわち、十分なフィールドワークなしには、社会・文化地理学的な研究は容易ではない、ということになる。さまざまな学問間で競い合っている地域研究の現状の中で、日本国内でメインのテーマの研究に従事しながら、その片手間に海外地域研究も行うというような研究姿勢での地理学的研究は、今や全く通用しなくなっている、というのは少し言い過ぎであろうか。

3. 若手研究者の育成

日本の地理学界における東南アジア研究の今後の発展のためには、若手研究者の育成が不可欠である。かつては、東南アジアに私費で出かけることは容易ではなかったが、今日、東南アジアは、日本人にとって、従来とは比べものにならないほど、近づきやすい地域となった。意欲さえあれば、繰り返し現地を訪れることも可能である。筆者の体験からすると、できるだけ若いうちに、現地を体験させることが必要である⁵⁾。それが、研究意欲を刺激させることになる。ただし、国内においてフィールドワークの経験を十分に積ませることを欠かしてはならない。例えば、東南アジアで稲作農村の調査を行う意向の者が、日本の農村や稲の栽培方法に関心を示さず、また農業の基本的知識さえもたずに、東南アジアでフィールドワークを行うことは論外である。東南アジアで観察され

る現象の中には、日本において類似したものも多く、両者の比較によって、地域的特色がより明らかになるということはよくある。筆者自身の場合でいえば、日本国内の都市や農山村における聞き取りや土地利用調査、さらに横浜・神戸・長崎における中華街の調査などの経験が、のちに東南アジアの華人社会を調査した際に、大いに役だった。

若手研究者の育成にとって、最良の方法は、東南アジアへ留学する地理学研究者を増やすことである。留学という比較的長期間にわたって、現地で生活し、現地の言語を習得し、そしてインテンシブなフィールドワークが実施できれば何よりである。できるだけ多くの若い地理学研究者が、意欲的に東南アジアに出かけ、各地でフィールドワークに従事して、着実な研究成果が蓄積されることを切に望みたい。

本稿の作成に際して、英文要旨の校閲を横浜国立大学教育学部の矢ヶ崎典隆助教授にお願いした。記して深く感謝申し上げます。

(1991年12月7日受理)

注

- 1) 『地理学評論 総索引 第51巻(1978)～第60巻(1987)』によれば、この10年間、「地理学評論(Ser. A)」に掲載された東南アジア関係の論文は、山下(1985)、太田(1985)の2編のみであり、「地理学評論(Ser. B)」においても、Ota(1985)、Yamashita(1986)、Umehara(1987)の3編にすぎない。同様に、『経済地理学年報 総目録 第26巻～第35巻(1980～1990)』によれば、この期間に、「経済地理学年報」に掲載された東南アジア関係の論文は、山川(1982)の1編のみという状況である。なお、「人文地理」においては、1980～1990年の期間中、東南アジア関係の論文は見当たらない。
- 2) 日本において出版された東南アジア関係の図書に関しては、アジア資料懇話会 東南アジア目録作成委員会編(1985)が有用である。
- 3) 別枝(1970)は、彼自身の東南アジア研究の歩みを、自ら述べたものである。
- 4) 太田・今富(1987)については、筆者による書評がある(経済地理学年報, 第34巻第4号, pp. 306-

308).

5) 筆者のシンガポール留学の体験や、東南アジア留学のすすめに関しては、山下(1988b)を参照されたい。

文 献

- 秋山道雄「マレーシアの経済発展と環境問題」(所収 アジア地理研究会編『変貌するアジア』古今書院, 1990年).
- アジア資料懇話会 東南アジア目録作成委員会編『東南アジア邦文資料目録 1946-1983』アジア資料懇話会, 1985年.
- アジア地理研究会編『変貌するアジア』古今書院, 1990年.
- 生田真人「クアラルンプル:多核的都市圏の形成」(所収 大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市 ⑥ バンコク クアラルンプル シンガポール ジャカルタ』東京大学出版会, 1989年).
- 生田真人「クアラルンプル都市圏の流通近代化」(所収 アジア地理研究会編『変貌するアジア』古今書院, 1990年).
- 石田 寛・浜 英彦・高橋 彰「アジアにおける『緑の革命』と農村の変貌(シンポジウム)」『地理学評論』第47巻第2号, 1974年.
- 石田龍次郎「地理学的研究の中身と東南アジアの課題」『地学雑誌』第75巻第2号, 1966年.
- 入江敏夫編, 古賀正則著『新しい世界の地理 第2巻 東南アジア』日本評論社, 1958年.
- 岩田慶治「ボロヴェン高原の人文地理—開拓と民族—」『人文研究』第11巻第2号, 1960年.
- 岩田慶治「東南アジアにおける居住様式の地理学」『人文研究』第13巻第11号, 1962年.
- 岩田慶治『東南アジアのこころ—民族の生活と意見—』アジア経済研究所, 1964年.
- 岩田慶治「東南アジア研究の意味—とくに少数民族の諸問題をめぐって—」『人文地理』第19巻第6号, 1967年.
- 岩田慶治『東南アジアの少数民族』日本放送出版協会, 1971年.
- 岩田慶治編『世界地誌ゼミナールⅡ 南アジア』大明堂, 1972年.
- 岩田慶治・小堀 巖・高橋 彰・末尾至行・吉川虎雄「海外調査と地理(座談会)」『地理』第5巻第12号, 1960年.
- 梅原弘光「中部ルソンのハシエンダ・バリオーヌエバ・エシハ州 サン・アンドレス村の事例—」『アジア経済』第13巻第9号および第11号, 1972年.
- 梅原弘光「フィリピンにおける『緑の革命』と農民—中部ルソン, ヌエバ・エシハ州の1村落事例を中心として—」『アジア経済』第19巻第9号, 1978年.
- 梅原弘光編『東南アジア農業の商業化』アジア経済研究所, 1988年.
- 梅原弘光編『東南アジアの土地制度と農業変化』アジア経済研究所, 1991年.
- 海野一隆・林 寿一『ボルネオの人と風土』古今書院, 1968年.
- 遠藤 元「北タイ, チェンマイ市の人口成長とその要因」『経済地理学年報』第37巻第3号, 1991年.
- 大島囊二「フィリピン養魚池漁業の地理学的分析」(所収 平沢 豊編『東南アジアの漁業開発』アジア経済研究所, 1977年).
- 太田 勇「シンガポール・ジュロン工業団地の民族集団」『地理学評論』第49巻第12号, 1976年.
- 太田 勇「シンガポール」(所収 高野史男・山本正三・正井泰夫ほか編『世界の大都市(下)』大明堂, 1979年).
- 太田 勇「マレーシア, シンガポールの言語環境と華語社会」『地理学評論』第58巻第5号, 1985年.
- 太田 勇・今富正巳「マレーシア, シンガポールの華人社会の変貌」(所収 太田 勇・大坪省三・前田尚美編『東南アジアの地域社会—その政治・文化と居住環境—』東洋大学, 1987年).
- 太田晃舜「ベトナムにおける都市形成過程の特徴—ハノイ, ホーチミン両都市の比較考察—」『歴史地理学』第136号, 1987年.
- 大友 篤「バンコク」(所収 高野史男・山本正三・正井泰夫ほか編『世界の大都市(下)』大明堂, 1979年).
- 大友 篤・嵯峨座晴夫編『アジア諸国の人口都市化』アジア経済研究所, 1984年.
- 大西青二「ラッフルズのシンガポール都市建設について」(所収 織田武雄先生退官記念会編『人文地理学論叢』柳原書店, 1971年).
- 大野盛雄編『アジアの農村』東京大学出版会, 1969年.
- 大矢雅彦『河川の開発と平野—東南アジアを中心として—』大明堂, 1979年.
- 規工川宏輔「フィリピンの稲作地域における灌漑の進

- 展について』『熊本大学教育学部紀要（人文科学）』第30号，1981年。
- 菊池一雅『ベトナムの農民』古今書院，1966年。
- 菊池一雅『インドシナの社会構造』早稲田大学出版部，1975年。
- 菊池一雅『ケシをつくる人々』三省堂，1979年。
- 菊池一雅『東南アジアの国家と住民』大明堂，1984年。
- 菊池一雅『ベトナムの少数民族』古今書院，1988年。
- 熊谷圭知「ジャカルタの『二重構造』とその変容—インフォーマル・セクターとカンポンをめぐる—」（所収 アジア地理研究会編『変貌するアジア』古今書院，1990年）。
- グルー，ピエール著，上野福男監訳，山本正三・田中真吾・谷治正孝訳『熱帯の地理—社会的経済的諸条件とその展望—』朝倉書店，1971年。
- 巖 勝雄「シンガポールの工業化」『経済地理学年報』第18巻第2号，1972年。
- 神前進一「マレーシアにおけるプランテーション型農業の変貌」（所収 アジア地理研究会編『変貌するアジア』古今書院，1990年）。
- 斎藤 功「熱帯の避暑集落と温帯野菜栽培」（所収 斎藤 功・野上道男・三上岳彦編『環境と生態』古今書院，1990年）。
- 斎藤一正「東南アジアにおける華僑の生態—その経済的地位—」『人文地理』第13巻第3号，1961年。
- 斎藤 毅「東南アジアにおける水産養殖業の特性」（所収 藪内芳彦編『漁撈文化人類学の基本的文献とその補説的研究』風間書房，1978年）。
- 酒井敏明「ビルマのカチン族—新生国家における少数民族の問題—」（所収 織田武雄先生退官記念会編『人文地理学論叢』柳原書店，1971年）。
- 佐々木高明『熱帯の焼畑—その文化地理学的比較研究—』古今書院，1970年。
- 佐藤哲夫「タイの都市システム」（所収 山口岳志編『世界の都市システム』古今書院，1985年）。
- シュトルツ，H. U. 著，野上裕生訳『ビルマ—地誌・歴史・経済—』創文社，1974年。
- 白坂 蕃・Lai Poh Heong「マレーシア，the Cameron Highlands における農業と集落の発展—熱帯アジアにおける hill station 開発の一事例—」『東京学芸大学紀要 第3部門社会科学』第41集，1990年。
- 杉本尚次「東南アジアの住居—分布を中心として—」『季刊人類学』第2巻第3号，1971年。
- 鈴木二郎・石川栄吉・岩田慶治編『世界の文化地理第2巻 東南アジア』講談社，1964年。
- 瀬川真平「ジャカルタとカンポンの住民—都市化の文化的側面—」（所収 アジア地理研究会編『変貌するアジア』古今書院，1990年）。
- 全国地理教育研究会編『地理教師のみた東南アジア』古今書院，1969年。
- 高橋 彰『中部ルソンの米作農村—カトリナン村の社会経済構造—』アジア経済研究所，1965年。
- 高橋 彰「地理学における外国研究の方法」『地理』第14巻第1号，1969年a。
- 高橋 彰「バリオ=カトリナン—フィリピンの米作農村—」（所収 大野盛雄編『アジアの農村』東京大学出版会，1969年b）。
- 高橋 彰「バリオとデサー—中部ルソンと中部ジャワの農村社会経済構造—」『経済学論集』（東大経済学会）第48巻第1号，1982年。
- 高谷好一『熱帯デルタの農業発展—メナム・デルタの研究—』創文社，1982年。
- 高谷好一『東南アジアの自然と土地利用』勁草書房，1985年。
- 高谷好一編『東南アジアの自然』（講座 東南アジア学 第2巻）弘文堂，1990年。
- 高山正樹「シンガポール：変容する都市国家の社会・経済構造」（所収 大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市⑥ バンコク クアラルンプル シンガポール ジャカルタ』東京大学出版会，1989年）。
- 田辺健一『都市の地域構造』大明堂，1971年。
- 谷内 達「地学雑誌の1世紀に見る海外調査研究の歩み，1889～1990」『地学雑誌』第100巻第1号，1991年。
- 寺本 潔「明治以降のわが国の地理学における南洋および南方圏に関する文献目録(1)」『愛知教育大学研究報告（人文科学編）』第36輯，1987年。
- 寺本 潔「明治以降のわが国の地理学における南洋および南方圏に関する文献目録(2)」『愛知教育大学研究報告（人文科学編）』第37輯，1988年。
- デルヴェール，ジャン著，菊池一雅訳『東南アジアの地理』白水社，1969年。Delvert, Jean.: *Géographie de L'Asie du sud-est*. Paris: Presses Universitaires de France, 1967.
- ドビー，E. H. G. 著，小堀 巖訳『東南アジア』古今書院，1961年。Dobby, E. H. G.: *Southeast Asia*. London: University of London Press, 1950.

- 友杉 孝「ムーバン＝サンカプトンギー北部タイの米作農村」(所収 大野盛雄編『アジアの農村』東京大学出版会, 1969年).
- 中原いづみ「半島マレーシアの都市化—1970年代のブミプトラ政策下の都市化を中心に—」『お茶の水地理』第32号, 1991年.
- 能 登志雄「東南アジアの集落」(所収 木内信蔵・藤岡謙二郎・矢嶋仁吉編『集落地理学講座第4巻 世界の集落』朝倉書店, 1959年).
- 能 登志雄『湿潤熱帯』朝倉書店, 1970年.
- 野間晴雄「東北タイ農村の食生活と食事文化」『奈良大学紀要』第11号, 1982年.
- 野間晴雄「東南アジアと地理学」(所収 奈良大学文学部地理学教室編『地理学の模索』地人書房, 1989年).
- 平戸幹夫『マラヤの地域構造—形成と変容—』拓殖大学海外事情研究所, 1976年.
- 平戸幹夫「新経済政策下のマレーシアの人口分布の変動」(所収 堀井健三・萩原宜之編『現代マレーシアの社会・経済変容—ブミプトラ政策の18年—』アジア経済研究所, 1988年).
- 平戸幹夫「工業化と労働力・人口移動」(所収 堀井健三編『マレーシアの工業化—多民族国家と工業化の展開—』アジア経済研究所, 1991年).
- 藤巻正己「クアラルンプールのあるインド系スクォーター集落—その中間調査報告: フィールド・ノートより—」『天理大学学報』第160輯, 1989年.
- 藤巻正己「ブミプトラ政策とマレーシアの都市社会変動—多民族都市クアラルンプールのスクォーター社会—」(所収 アジア地理研究会編『変貌するアジア』古今書院, 1990年).
- 船越昭生「南洋華僑について」(所収 岩田慶治編『世界地誌ゼミナールII 南アジア』大明堂, 1972年).
- 平凡社編『世界文化地理大系第9巻 東南アジア篇』平凡社, 1955年.
- 別技篤彦「熱帯についての地理学的研究の展望—東南アジアを中心として—」『人文地理』第12巻第3号, 1960年.
- 別技篤彦『東南アジア 諸島の居住と開発史』古今書院, 1960年.
- 別技篤彦『プランテーション』古今書院, 1966年.
- 別技篤彦『モンスーンアジア—その自然と人間』アジア経済研究所, 1969年.
- 別技篤彦「東南アジア研究30年の小史」(所収 渡辺光教授退官記念会編『現代の地理学—その課題と展望』古今書院, 1970年).
- 別技篤彦『アジア社会誌—東南アジア編—』古今書院, 1972年.
- 別技篤彦『東南アジア地域研究史序説—ラッフルズの業績を中心に—』大明堂, 1977年 a.
- 別技篤彦『モンスーンアジアの風土と人間』泰流社, 1977年 b.
- 正井泰夫「都市景観から見た東南アジア—自然環境・都市化・都市問題—」(所収 柴田 徳衛・加納 弘勝編『第三世界の都市問題』アジア経済研究所, 1986年).
- 村上 誠「シンガポールにおける工業発達」『地理学評論』第41巻第9号, 1968年.
- 矢延洋泰『小さな国の大きな開発—シンガポールの現代化—』勁草書房, 1983年.
- 藪内芳彦「東南アジアにおける漁業の地理学的研究の諸問題」(所収 小牧実繁先生 古稀記念 事業委員会編『人文地理学の諸問題』大明堂, 1968年).
- 藪内芳彦『東南アジアの漂海民—漂海民と杭上家屋民—』古今書院, 1969年.
- 藪内芳彦「マレー半島の漁村」(所収 岩田慶治編『世界地誌ゼミナールII 南アジア』大明堂, 1972年).
- 山川充夫「中部ルソン・ママンディル村の社会経済構造と親族関係」『経済地理学年報』第28巻第3号, 1982年.
- 山口弥一郎『東南アジアの地誌』文化書房 博文社, 1970年.
- 山下清海「東マレーシア・サラワクにおける華人方言集団の分布パターン」『地学雑誌』第91巻第5号, 1982年.
- 山下清海「シンガポールにおける華人方言集団のすみわけとその崩壊」『地理学評論』第58巻第5号, 1985年.
- 山下清海『東南アジアのチャイナタウン』古今書院, 1987年.
- 山下清海『シンガポールの華人社会』大明堂, 1988年 a.
- 山下清海「シンガポール 留学の体験から」『地理』第33巻第12号, 1988年 b.
- 山下清海「東マレーシア, サバ州サンダカンにおける華人系 カカオ・プランテーション 農業」『秋田大学一般教育 総合科目 研究紀要 諸民族の社会と文化 I』, 1990年 a.

- 山下清海「僑郷としての広東省潮州地方の社会地理学的考察—華僑送出地域と東南アジア華人社会との結びつき—」『秋田大学教育学部研究紀要 人文科学・社会科学』第41集, 1990年b.
- 山下清海「チャイナタウンの景観と華人の生態」(所収 戴 國輝編:『もっと知りたい華僑』弘文堂, 1991年).
- 渡辺 光編『新世界地理第4巻 東南アジア』朝倉書店, 1959年.
- 渡辺 光編『世界地理3 東南アジア』朝倉書店, 1971年.
- Ota Isamu. "Recent changes in the Chinese-speaking environment of Singapore." *Geographical Review of Japan* 58 (Ser. B, No. 2), 1985.
- Shirasaka Shigeru. "The agricultural development of hill stations in tropical Asia: a case study in the Cameron Highlands, Malaysia." *Geographical Review of Japan* 61 (Ser. B, No. 2), 1988.
- Umehara Hiromitsu. "Technological innovation and agrarian change in the Philippines: with special reference to rice farming in the 1970s." *Geographical Review of Japan* 60 (Ser. B, No. 1), 1987.
- Yamashita Kiyomi. "The residential segregation of Chinese dialect groups in Singapore: with focus on the period before ca. 1970." *Geographical Review of Japan* 59 (Ser. B, No. 2), 1986.
- Yamashita Kiyomi. "Breakdown of the residential segregation of Chinese dialect groups in Singapore." *Science Report, Sect. A, The Institute of Geoscience, The University of Tsukuba* 8, 1987.

Contribution of Japanese Geographers to the Study of Southeast Asia after World War II

YAMASHITA, Kiyomi

This paper attempts to review the geographical studies on Southeast Asia published in Japan after World War II, and to point out problems of such studies for the further development of the field.

Most Japanese geographers who participated in the study of Southeast Asia soon after World War II had spent some time in the region during the war. In the latter half of the 1950's, Japanese geographers resumed field surveys in Southeast Asia. Since then, agricultural and rural geography has been the main area of interest. Detailed monographs were written by those who carried out long-term participant observations in rural villages. More recently, geographers are increasingly concerned with the rapid change taking place in agricultural activities and rural settlements.

On the other hand, urban geography of Southeast Asia was where few studies were accumulated, though there is now a growing interest in such urban studies. Geographers have also given little attention to the study of industrialization and economic development, despite the fact that they have been major research themes for researchers in the area studies of Southeast Asia. A major focus of

cultural geographers has been on minority groups, including the hill tribes in the mainland Southeast Asia, and further development of this field is greatly expected.

On the whole, Japanese geographers have so far made a limited contribution to the area studies of Southeast Asia. It would be necessary to attach much importance to the field work, to expand the study area and research topics, and to train young specialists, in order to promote the geographical understanding of Southeast Asia.